

有機農業技術のつぼ

作物名	ミニトマト
対応技術の項目	その他
	栽培改善法
	不耕起栽培技術 ほか

《情報収集先の経営概要等》

せたな町 大口 義盛 経験年数14年（うち有機年数8年）

経営耕地面積 14.16ha（全面有機）

水稲 2.06ha

ミニトマト 0.7 ha

牧草 11.4 ha （めん羊 130頭）

労働力 家族3人、パート1人

有機JAS認定の取得状況 平成19年取得

問題点

ミニトマトの草勢が強くなりすぎ、品質の確保が難しかった

- 作物残渣を土中に鋤込むと、翌年の草勢が強くなりすぎ、目標とする品質の確保が難しかった。

対応

不耕起・無かん水・無肥料栽培を導入した

つぼ

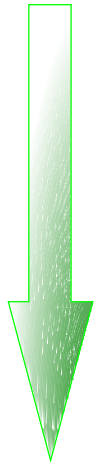
- 不耕起栽培を導入した。
- また、高糖度・良食味とするため、無かん水・無肥料栽培とした。
- ・ 苗はポット苗若苗を使用し、前年の株のマルチ穴に押しつけるように置く。（置く前に、苗を水に浸漬する）
- ※ これにより、直根が伸び、根の活着が促され、土壤水分を効率的に吸収できるようになった。



ポットの形状が残る株元



マングローブのような根



- ・ 収穫後の作物残渣は通路に置き、その上から自家製堆肥（めん羊堆肥）1,500kg/10aを施用（堆積）し、地力の確保に努めている。
 - ※ 植物体や有機質が分解し、8年間で15～20cm程度の微生物に富んだ有機質層が形成されてきている。
 - また、堆肥の投入量は作物の生育をみながら調整しており、近年は投入量を減らしている。



残渣を堆積した畦間



複数年使用するマルチと残渣堆積物

※ **対応技術活用上の注意点**

- ・ 栽培ほ場は泥炭土壌であり、保水力と地力のある土壌であることから、無かん水・無肥料栽培が可能となったものと考えられる。そのため、ほ場条件等によっては、かん水や追肥をしないと安定的な栽培ができない可能性もあるので注意が必要である。
- ・ また、土壌表面の有機質層により、土壌表面からの水分の蒸散をおさえ、土壌の乾燥を抑制しているものと考えられる。
- ・ なお、不耕起栽培により、耕盤層ができていないため、根域が深くまで張られるものと考えられる。

成 果

ミニトマトの品質が向上した

- 果実の糖度は10度以上を確保できた。
- 草勢がおとなしくなり、病害も少なくなった。
 - ・ 収量は慣行の6割程度だが、良品質のため固定客を確保できている。
- ベットやマルチ、支柱などは据え置きで複数年使用するため、農作業の負担は大幅に軽減されている。



完熟で収穫するミニトマト